

ルカによる福音書8章1-8節 「あきらめない祈り」

1A 失望の多い世 1

1B 終わりの日にあるつまずき

2B 聖霊の執り成しの助け

3B 絶え間ない祈り

2A 不正の裁判官でも聞く訴え 2-5

1B 神を恐れない裁判官

2B やもめの窮状

3B 裁きによる救い

3A 正しい神の裁き 6-8

1B 選ばれているがゆえに、叫び求める者

2B 速やかな裁き

3B 地上に残っている信仰

本文

ルカによる福音書 18 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 17 章まで来ました。今朝は、18 章の 1-8 節までを見ていきます。次回、その後の 9 節以降を見ていきたいと思います。まず、1 節から 8 節全体を読んでみましょう。

1 いつでも祈るべきで、失望してはいけないことを教えるために、イエスは弟子たちにたとえを話された。2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。3 その町に一人のやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私を訴える人をさばいて、私を守ってください』と言っていた。4 この裁判官はしばらく取り合わなかったが、後になって心の中で考えた。『私は神をも恐れず、人を人とも思わないが、5 このやもめは、うるさくて仕方がないから、彼女のために裁判をしてやることにしよう。そうでないと、ひっきりなしにやって来て、私は疲れ果ててしまう。』6 主は言われた。「不正な裁判官が言っていることを聞きなさい。7 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってください。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

イエス様が、エルサレムへの旅をしておられる中で、そこには群衆がいて、弟子たちがいて、そしてパリサイ派の人たちもいるような状態です。聖書のどこの箇所もそうですが、ルカによる福音書を読む時に、ぜひ流れをもって読んでみてください、18 章という章の区切りがあるのですが、17 章の続きになっています。パリサイ派が 17 章で、「神の国はいつ来るのか(20 節)」とイエス様に

問い質したところから始まります。主は、「17:21 神の国はあなたがたのただ中にあります。」と言われましたが、それは神の国の王であられるキリストが、今、あなたがたの目の前にいるのですよ、ということです。そこで弟子たちに対して今度は語られます。「17:22 あなたがたが、人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない日が来ます。」そして、主が再び来られるにあたって、残される者もいて、また取られる者もいるという話をされていました。

1A 失望の多い世 1

ですから、イエス様がここで何を云わんとされているのか？それは、「ご自身が昇天されてから、再び来られるまで、失望しないで、何度でも何度でも祈っていなさい。」ということです。8 節のところに、「人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか」と言われていますが、主が再び来られる時までには、失望してしまって、神を信じ、期待することがなくなってしまっているのではないかと懸念されているのです。

1B 終わりの日にあるつまずき

終末について語る時に、しばしば、「既に、そして、未だ」という言葉が使われます。つまり、イエス様が既に来てくださいました。私たちの罪のために十字架の上で死なれて、葬られて、三日目に甦られました。そして天に昇られて、聖霊を送ってくださいました。ですから、私たちには、霊的に、神の国が来ています。パウロは、「ローマ 14:17 なぜなら、神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです。」と言ったように、聖霊による義、平和、喜びがあるところには、神の国が来ています。

けれども、未だ神の国は来ていないのです。イエス様は、「11:2 御国が来ますように。」と祈りなさいと言われました。主が再び来られて、地上に神の国を立てられる時を待ち望みなさいと命じておられます。確かに罪が赦され、罪を犯さなくてよい力も与えられ、聖霊の義、平安、喜びが与えられているのですが、被造物はまだ束縛の中にあり、私たちの体も相変わらず、アダムから引き継いだ罪の性質を抱えています。その中で、肉との戦いがあり、そしてこの世を支配する悪魔や悪霊どもに対する戦いがあります。それで、私たちには「うめき」があるということ、パウロは話しました。「ロマ 8:22-23 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだに贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」

ですから、失望してしまうことが多いのです。イエス様は、オリーブ山で世の終わりの徴について語られた時に、躓きが多くなるので、最後まで忍耐しなさいと励ましておられます。「マタ 24:9-13 そのとき、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合いま

す。また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」キリスト者に対する迫害は、今、一億人であるとも言われています。しかし、キリスト者にそのような悪が行われているのは、社会全体がおかしくなっているからです。互いに裏切り、憎み合います。それから、偽預言者が多く現れるので、神の真理の言葉から人々が離れてしまいます。そして不法がはびこると、せつかく無私の心で愛していたものが冷えてしまうのです。こういった失望するようなことがあっても、それでも忍耐して、その後には主の救いがある、つまり主が教会のために戻って来られるという希望があります。

2B 聖霊の執り成しの助け

興味深いことに、私たちの霊が呻いているということをパウロがローマ 8 章で話したその次に、話してくれているのは、うめきと共に助けてくださる聖霊の働きです。「8:26 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくさるのです。」私たちの生活で、もう言葉にはならないもの、というものが多くなっていませんか？人々が怒ることが多くなってきましたが、それは、自分たちには理解を超えるようなことが起こっているからです。今までの自分の生活の根底が揺るがされるようなことが、起こっているからです。けれども、私たちが怒りを持って、それで神の義を実現させるものではありません。それらは人間の知性では説明がつかないもの、理解できないものが増えています。けれども、主は言葉にならないそのような呻きについて、聖霊が助けてくださって、執り成しをしてくさるのです。それが、異言の賜物が与えられて、霊で祈るかもしれませ。あるいは、単純に、ハンナのように口だけが動いていて言葉になっていないというものかもしれませえん。けれども、聖霊がその時、助けてくださるのです。聖霊は、主が天に昇られてから弟子たちが孤児のようにならないように、父にお願いして遣わされた、もうひとりの助け主です(ヨハネ 14:16-18)。

3B 絶え間ない祈り

ですから、イエス様がここで命じておられるように、「いつでも祈るべき」と言われています。これは、途切れなく継続するという意味よりも、「断続的に、何度も」というような意味です。私たちはしばしば、主は必要を知っておられるのだから、一度祈れば、聞いてくださるのだから、何度も祈るのは不信仰の表れだ、と誤ってしまいます。もし、それが神に印象付けるために、神に影響を与えるために繰り返し祈るのであれば、マタイ 6 章でイエス様が言われているように、異邦人が祈っているように、繰り返し祈っているのと同じになってしまうので、間違っています。けれども、主から語りかけがあるまで、心に平安が与えられるまで、何度も祈り続けることは大切です。イエス様は、ゲッセマネの園で、「マル 14:36 どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたのお望みになることが行われますように。」と祈られましたが、同じ言葉をもってまた祈られたとあります。三回、同じ祈りをされました。そして使徒パウロも、肉体の棘が取り除かれることについて、「Ⅱコリ 12:8 三度、主に願った」とあります。

こういった、いつでも祈る祈りは、聖霊の力の助けによって、忍耐して進んでいくことをパウロは、霊の戦いのことを述べている中で話しています。「エペ 6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」御霊によって、その力の中で祈るのです。

2A 不正の裁判官でも聞く訴え 2-5

そこで主が、弟子たちを励ますために、極端な喩えを使われます。不正の裁判官です。よりによって、正しい神への訴えを、不正の裁判官に対する訴えで喩えているのですから、イエス様はユーモアのある方だと思います。以前にも、不正の管理人の例えをイエス様は使われていましたね。それも難解でありながらも、ユーモアがありました。

1B 神を恐れない裁判官

2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。」

ユダヤ人にとって、「神を恐れ」ない裁判官というのは、致命的です。モーセが、舅のイテロから、自分に代わる裁き人を立てなさいと助言を受けた時に、彼はこう言いました。「出エジ 18:21 あなたがたはまた、民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ」なさい、とあります。ソロモンは、人々を裁くために知恵のある王として世界中に知られるようになりましたが、彼は格言の初めとして、箴言の中でこう言いました、「9:19 主を恐れることは知恵の初め」。裁判官は、旧約聖書ではなんと、エロヒムという、神と同じ言葉があてがわれており、人の運命を神のように変える力と全権を持っている訳です。ですから、その大きな権限を知って、主なる神がおられることを知って、それで公正な裁きをしなればいけないように、厳に戒められています。神がそうした裁き司を裁かれることが、詩篇 82 篇に書かれています。「神は、神の会議の中に立ち、神々のただ中でさばきを下さす。」とあります。

そして神を恐れていないので、人を人として思っていない。その詩篇 82 篇の続きは、こう書いてあります。「詩 82:2-4 いつまでおまえたちは不正をもってさばき悪しき者たちの味方をするのか。セラ 弱い者とみなしごのためにさばき苦しむ者と乏しい者の正しさを認めよ。弱い者と貧しい者を助け出し悪しき者たちの手から救い出せ。」当時は、賄賂は当たり前でした。今でさえ、お金のあつた人が裁判では、優秀な弁護士を雇えるので力がありますが、比べ物にならないぐらい、常態化していました。ですから神は何度となく、貧しい人の訴えを聞きなさいと言われました。悪者から救い出すのが、あなたがたの務めだとまで言われています。ですから、このような裁判官は、日本語でいけば、「人でなし」です。彼はおそらくは、賄賂を受け取っていたことでしょう。ところが、それでも寡の裁きを担当した、というのがここでの味噌です。

2B やもめの窮状

3 その町に一人のやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私を訴える人をさばいて、私を守ってください』と言っていた。

裁判官について聖書は多くを語っているだけでなく、寡についても多くを語っています。主が、出エジプト記で語られています。「出 22:22-23 やもめ、みなしごはみな、苦しめてはならない。もしも、あなたがその人たちを苦しめ、彼らがわたしに向かって切に叫ぶことがあれば、わたしは必ず彼らの叫びを聞き入れる。」みなしごと並べて、やもめのことを語っておられます。つまり、同じような窮状にあったのです。そして、例えば、ルツ記にあるナオミとルツの姿は、乞食になる一歩手前の状態として描いていますね。

具体的には、ここでは「私を訴える人をさばいて」と言っていますが、当時のローマ社会では借金をすると、債権者はその人を訴えて牢屋に入れることができるのです。そこから救い出してくれ、と訴えています。ですから、裁きをすること自体が人を救うことそのものだったのです。

3B 裁きによる救い

4 この裁判官はしばらく取り合わなかったが、後になって心の中で考えた。『私は神をも恐れず、人を人とも思わないが、5 このやもめは、うるさくて仕方がないから、彼女のために裁判をしてやることにしよう。そうでないと、ひっきりなしにやって来て、私は疲れ果ててしまう。』

この裁判官が、裁判をしてやった理由というのが、何でしょうか？「私は疲れ果ててしまう。」というものです。彼女に対する憐れみなど全くないのです。うるさくて仕方がなく、疲れ果ててしまうからという、あまりにも程度の低い理由で、彼女のための裁きを担当しました。全然、ほめられた話ではありません。

3A 正しい神の裁き 6-8

1B 選ばれているがゆえに、叫び求める者

6 主は言われた。「不正な裁判官が言っていることを聞きなさい。7 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。

イエス様は、不正な裁判官の言っていることを聞きなさいと大胆なことを言われています。ここでイエス様が不正の裁判官から神ご自身の裁きと救いの話をされているのは、似ているからではなく、むしろ違うからです。「不正の裁判官でさえ、しつこい訴えを聞いたのだから、ましてや、正しい神が、選ばれた者たちのために聞かれないことはないのだ、ということです。「まして」という言葉が鍵です。英語ですと、how much more となります。不正の裁判官でさえ、しつこい訴えを聞くの

だから、ましてや正しい神は、選ばれた者たちのための訴えを聞くということです。

「**選ばれた者たち**」という言葉ですが、これは、残された者たちと言い換えても良いでしょう。旧約聖書には、数多く、主のことばを恐れる者たちが残されていて、他の不従順な者たちについて終わりの日の患難の中で滅んでしまうが、その残された者たち、悩みと苦しみの中にいる者たちを救ってくださるという約束があります。「イザ 66:2 わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」そして、こうした選ばれた者たちは、いつも嘲られます。中傷を受けます。苦しみに会います。しかし、主が見方になってくださり、救ってくださるので、キリストにあつて選ばれた者たちも同じで、ローマ 8 章には、「8:33 だれが、神が選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。」とあります。

そのような人たちは、「**昼も夜も神に叫び求めている**」とありますね。そうです、苦しみが持続するからです。自分たちが叫んでいても、一向に状況が改善されているように見えないからです。いや、一時的に改善されているように見えても、また元通りになってしまうからでしょう。だから、一度、祈って終わりではありません。二度も、三度も、同じ祈りを捧げるのです。初代教会の兄弟姉妹が、「マラナタ」という挨拶をしたのは、今の世が悪くなっていて、主が来てください、それで裁いて救ってくださいという思いがあるからです。

私が感動するのは、日本が江戸時代、鎖国の時に、残されたキリシタンが 250 年もその信仰を守って来たことです。バスチャンと呼ばれる神父の弟子が、預言を行いました。それは、この状態は七代まで続くけれども、決して神は忘れない。その後は、神父が黒船でやって来る。そして、キリシタンが歌を歌って歩けるようになる。そして、異教徒が来ても、道を譲ってくれるほど自由になる、ということです。事実、約 250 年後に、ペリーの乗る黒船が来航して、長崎で教会堂を建て、神父が待っていたところ、そこから信徒たちが出てきたという話があります。

もう一つ感動するのは、イスラエル建国の前から、日本のキリスト者たちがイスラエルの回復のために熱心に祈っていたということです。イスラエル人でイエス様を信じている人たちが、来日して、自分たちの国よりも長く祈り続けている、高齢の姉妹たちに会いに来ました。その姉妹たちはもちろん、ユダヤ人に会ったこともありませんでした。けれども、イスラエルがみな救われて、それで主が戻って来られるという聖書の約束を信じて、国がまだないころから国が再建されるように、そしてイスラエル人が救われるように祈っていったのです。その後間もなくして、特高警察がそのような教会の人々を捕まえて弾圧を受けました。そうした苦しみの中でも彼らは失望しなかったのです。日本が敗戦したのは 1945 年ですが、その三年後 48 年にイスラエルが建国しました。そして、イエス様を信じる人々も増えて来て、自分たちがおばあさんたちの熱心な祈りの答えであることを知った時には、どれほど感動したことでしょうか！

2B 速やかな裁き

8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。

神の速やかな裁きというものがあります。ここで、速やかな裁きというのは、主がちょうどよいと思っておられる時に、速やかに裁きを行ってくださるということです。聖書には、主が来られる時に、それが遅いと感じるように見えるものがたくさんあります。例えば、不忠実な僕は、「主人はまだ来ないから」と思って、それで自分の下にいる者たちを打ちたたいたりしたことが書かれていますね。黙示録では、主が戻って来られる時に、もうぶどうが熟しすぎて、はち切れそうになっている様子が描かれています(14:18)。主の忍耐は、私たちには、まだ裁きを行ってくださらないのではないかと感じるのです。

しかし、主は必ず来てくださいます。速やかに裁いてくださいます。黙示録では、主が来られるのは、「時は近い」「わたしはすぐに来る」ということが書かれています。けれども、一向に主が裁いてくださっているようには思えない。そうした人の中で、聖書では預言者ハバククがいました。彼は、ユダの惨状を見て叫びました。「ハバ 1:2 いつまでですか、【主】よ。私が叫び求めているのに、あなたが聞いてくださらないのは。「暴虐だ」とあなたに叫んでいるのに、救ってくださらないのは。」そうやって、ユダの国にいつまでも正しい裁きをしてくださらないと叫びました。すると、主は、横暴な国民によって裁かれることを告げられました。バビロンによって裁かれるということです。ハバククは、全くわからなくなりました。なぜ正しい神が、裁かれる時に、ユダよりもさらに悪い国を器にされるのか？ということです。ユダが裁かれるのであれば、バビロンはなおさらのこと裁かれなければいけないのに・・・ということです。

彼は物見のやぐらに立って、主が私になんと語られるか見ることにしました。すると主が語られました。「2:3-4 この幻は、定めの時について証言し、終わりについて告げ、偽ってはいない。もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。見よ。彼の心はうぬぼれていて直ぐでない。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」矛盾しているように聞こえますが、「もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。」なのです。私たちとしては、遅くなっていると感じます。そして主は、それを知っておられます。けれども、遅れることはないのです。敏捷なライオンのように、すぐにやって来て、敵に対して戦ってくださるのです。だから、信じるのが大事です。神はその信仰を義と認めてください。

3B 地上に残っている信仰

イエス様が最後に、「だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」と言われているのが問題ですね。あまりにも長く続くようなのに、もう来ないのではないかと思ってしまう。それで祈ることを忘れてしまいます。酷ければ、先ほど言及した悪いしもべのように、自分

の仲間を打ちたたくことさえあります。失望の中で、世における不法、また教会における惑わしによって、愛が冷えていきます。主が望まれているのは、私たちが信じて祈っていることです。

私たちは、何度も希望を思い出す必要があります。先日、終末に生きるキリスト者のカンファレンスが開かれました。私は個人的にとても嬉しかったのです。主催したカルバリー府中のリッチさんが、このカンファレンスを開きたい思いを私に個人的に話してくれましたが、「今の時代、何か天からの希望を忘れて、この世がよくなればよいというような流れになって来ているのを感じている。」とのことでした。よく言ってくれた！と思いました。そしてカンファレンスの時、セッション1ではトラビスさんが、携挙について「思い出すことは大切だ」と言いました。そう、既に知っているものであっても、思い起こして、奮い立つ必要があります。ペテロが第二の手紙で行なったのがそれです。「1:12 ですから、あなたがたがこれらのことをすでに知り、与えられた真理に堅く立っているとはいえ、私はあなたがたに、それをいつも思い起こさせるつもりです。」それでペテロは、主が再臨されることについて語り始めました。

思い出すことによって、その希望が自分の信仰の中に取り戻されます。そして取り戻されたら、それにしたがって私たちは祈ります。祈り続けます。そのように見えない時にこそ、ここにイエス様が言われているように、昼も夜も訴えます。主は、必ず聞いてくださり、ご自分の良しとする時に速やかにその状況から救い出してくださいます。

最後に、チャック・スミスの「効果的な祈りの生活」にある話をご紹介します。「多くの場合、私たちは少し早くあきらめてしまいがちです。サタンは自分の支配力を失いそうになると、決まって死に物狂いになってつかみかかってきます。ここでよく私たちは、勝利を目前にしながら疲れてやめてしまうのです。」と言っています。そこでアメリカで昔、ゴールドラッシュで金脈を探している人の話を書いてあります。会社を設立して、設備投資して、金脈を掘り始めたそうなのです。債務を抱えるまでになりました。それであきらめて、金脈と設備を廃品回収業者に売ったそうです。そして、廃品回収業者が地質学の専門家を雇い、金脈の調査をさせたら、なんと、1 畝ほどばかり掘れば金脈が当たるとのことだったのです！

私たちは、神の約束が近づけば近づくほど、困難になることを知らないといけません。なので、あきらめなくなるのです。けれども、困難になっているということは、言い方を変えると、サタンと悪霊どもが、焦っているからなのです。私たちはさらに、とどめを刺すかの如く、祈り続けるのです。すると金脈、つまり主の約束をつかみ取ることができます。